# 令和5年度 奈良県立香芝高等学校 学校評価総括表（年度末報告 ）

【高等学校用】

| 年度 | 令和5年度（中期計画2年目） |
|---|---|
| 本校の使命（スクール・ミッション） | これまでの本校での取組と成果の上に、生徒・保護者及び地域のニーズを踏まえ、生徒が「行きたい」、保護者が「行かせたい」、そして地域から信頼される学校を創り、以下の人材を育成します。<br>１ 人権を尊重し、豊かな人間性と創造性を備えた人材<br>２ コミュニケーション能力や情報活用能力を備えた人材<br>３ 地域の高校として、地域の未来を担っていく人材 |
| 年度重点目標 | (1) 新しい高校教育への対応<br>① 観点別学習状況評価への完全対応<br>② 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善<br>③ ICT機器を活用した授業の推進・探究的な学習の推進<br>(2) 自他の生命を尊重する心の育成と、規範意識の向上<br>① ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事等を通して、主体性と協調性を身に付け、社会の一員として社会に貢献する意欲と責任ある態度の育成<br>② 爽やかな挨拶と生活マナーの向上、端正な制服の着こなしの定着<br>③ 交通ルールの遵守を中核に据えた安全教育の推進<br>(3) すこやかな心身の育成<br>① 運動に主体的に取り組む姿勢の育成と健康の保持増進への実践力の育成<br>② 特別支援教育の推進とスクールカウンセラー等を活用した教育相談の充実<br>(4) 地域から信頼され応援される学校づくりの推進<br>① 市の教育関係機関と連携した活動の展開<br>② ボランティア活動及び地域行事等への積極的参加<br>③ 近隣小・中学校との交流の推進<br>(5) 教職員の働き方改革への取組<br>① ワークライフバランスを意識した教職員の業務改善<br>② 定時退庁日（毎水曜日）を意識した業務改善 |

１ スクール・ポリシーの内容

| | | |
|---|---|---|
| 教育方針（スクール・ポリシー） | 入学者の受け入れに関する方針（アドミッション・ポリシー） | 本校では、以下のような生徒を積極的に受け入れます。<br>１ 本校の使命や教育方針を理解する生徒<br>２ 基礎的な学力が身に付いており、主体的に学ぶ意欲の高い生徒<br>３ 明るく、素直で、チャレンジ精神をもち、社会貢献の意識が高い生徒 |
| | 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー） | 本校では、確かな学力・豊かな人間性・健やかな心身の育成と、激動の社会に対応できる能力・意欲・創造性を養うことを教育方針とし、その実現のために以下の教育を行います。<br>１ 生徒一人一人の興味・関心や進路希望に対応するため、多様な科目選択ができるカリキュラムを編成します。<br>２ 個別最適な学びと協働的な学びを実現するために、ICTを最大限活用した授業を展開します。<br>３ 情報活用能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を育むため、言語活動を重視した探究型の学習を行います。<br>４ 学習意欲の向上を図り、主体的な学び・深い学びに繋げるため、ICTを効果的に活用した授業プログラムを展開します。<br>５ 主体性と協働意識、他者尊重と社会貢献の精神を涵養するため、学校行事や課題活動、ボランティア活動などを計画的に組み入れます。 |
| | 育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー） | 本校では、卒業までに、以下の資質・能力の育成を目指します。<br>１ 個人の尊厳を重んじ、礼節を学び、常に和敬の心をもって自他の向上に努めることができる。（和敬）<br>２ 学業に励み、真理を希求し、勤労と責任を重んじ、日々たゆまず努力し、新たな文化の創造に努めることができる。（創造）<br>３ 常に心身の錬磨に励み、高い知性と健全な身体を培い、強固な意志とたくましい実践力を身に付けている。（錬磨） |

２ 奈良県教育振興基本計画（「奈良の学び推進プラン」）が示す各テーマごとの学校教育目標

※(E)(F)評価基準
A･･･90%以上達成（十分である） B･･･70%以上達成(ほぼ十分である） C･･･50%以上達成（あまり十分でない） D･･･達成度50%未満（改善を要する）

| テーマ | 学校の教育活動に関する目標（A） | 計画期間における具体的目標（B） | 令和5年度末の目標値等（C） | 令和5年度末の状況（D） | 自己評価（E） | 学校関係者評価（F） | 改善方策（G） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ | 体力の向上 | 新体力テストTスコアの校内平均値が全国平均値以上 | 新体力テストTスコアの校内平均値が全国平均値程度 | 全種目男子平均値が48.7、女子平均値が48.0で全国平均を下回った。 | C | C | 持久力の数値が特に低く、その他ボール投げや上体起こしの数値も低い。これらは継続的に運動をする習慣をつけさせることが必要である。運動部活動への加入率を上げる取組を進めるとともに、日常に運動を取り入れる姿勢を保健体育の授業の中で育む。 |
| | 望ましい生活習慣の確立 | １人あたり年度遅刻回数(怠惰や不注意によるもの)が2回以下 | １人あたり年度遅刻回数(怠惰や不注意によるもの)が3回以下 | 2学期末時点で１人あたり年度遅刻回数は3.65回であった。 | C | C | 遅刻者集会など、遅刻した生徒へ指導する機会さらにを設けて、遅刻を繰り返すことのないように指導する。入室許可書を有効的に活用し、本人の遅刻に対する意識を高めるようにしていく。 |
| | 自他を尊敬する和敬の心の涵養 | 校内生徒アンケートの設問「他人の気持ちを、きちんと思いやることができていますか」に肯定的回答が95%以上かつ、「とてもそう思う」の回答が45%以上 | 校内生徒アンケートの設問「他人の気持ちを、きちんと思いやることができていますか」に肯定的回答が94.8%かつ、「とてもそう思う」の回答が40%以上 | 校内生徒アンケートの設問「他人の気持ちを、きちんと思いやることができていますか」に肯定的回答が94.8%かつ、「とてもそう思う」の回答が36.1%であった。 | B | B | 定期的に校門での挨拶運動を行うなど、生徒間で声を掛け合ってコミュニケーションを図る機会を増やし、他者との共感能力を高め、和敬の心を育てる。 |
| 2. 学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ | 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 | 生徒授業アンケートの設問「（授業中に）考えたり、活動したりする時間が十分にあった」の評価が全学年で3.5以上 | 生徒授業アンケートの設問「（授業中に）考えたり、活動したりする時間が十分にあった」の評価が3学年平均で3.5以上 | 2学期の生徒授業アンケートでは、評価が3学年で平均3．45であった。 | A | A | 次年度はすべての普通教室に電子黒板が導入され、生徒全員が１人１台端末をもつ環境になる。その環境のもと、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図り、授業中に考えたり、活動したりする時間を創出することで、生徒の学ぶ力、考える力、探究する力を育む。 |
| | 学習意欲の向上 | 校内生徒アンケートの設問「授業中、充実感を感じていますか」に肯定的回答の割合が全学年で85%以上 | 校内生徒アンケートの設問「授業中、充実感を感じていますか」に肯定的回答の割合が3学年平均で85%以上 | 校内生徒アンケート「授業中、充実感を感じていますか」に対して、肯定的回答の割合が3学年平均で83.7%であった。 | A | A | 学年別では、１年86.1%、2年81.5%、3年83.4%であった。進級するにつれて肯定的回答が減る傾向にあり、学習内容に応じた学習意欲向上を図るため、上記改善方策と合わせた授業改善を図る。 |
| | ICTを活用した教育の推進 | 校内生徒アンケートの情報活用能力に関する設問に肯定的回答が入学時比で20%増 | 校内生徒アンケートの情報活用能力に関する設問に肯定的回答が入学時比で15%増 | 左記の通り、授業アンケートにおいて、情報活用能力に関する項目は微増したが、スタディサプリにおける到達度テスト連動課題の提出率が１学期は90%を超えたが2学期は60%台になった。 | B | B | ICTを活用した授業への実践を促し、生徒の情報活用能力を向上させる。スタディサプリ等の学習アプリを効果的に活用する。 |
| | 読書活動の推進 | 月に全く読書をしない生徒の割合50%以下 | 月に全く読書をしない生徒の割合60%以下 | 平均して0冊しか読まないと回答した生徒の割合が65%であった。2･3年は昨年度より減ったが１年生の割合が上がり全体として昨年同様の結果となった。 | C | C | 月平均して１～2冊の本を読むと回答する生徒は2･3年生では30%を超えているので、現在の取組を充実させて、一層読書活動の推進に努める。１年生の読書離れに対しては、授業での図書利用の機会を増やせるよう教科との連携を強める。 |
| | 学校における働き方改革の推進 | 教職員の年休取得が平均14日以上 | 教職員の年休取得が平均13日以上 | 4/1～12/31までの年休取得は、平均8.6日であった。3月後半の年休取得しやすい時期に取得を促していく。 | B | B | 業務遂行の効率化を推進するとともに、休暇を取得しやすい職場の雰囲気づくりを推進する。 |
| 3. 働く意欲と働く力をはぐくむ | インターンシップの充実 | インターンシップまたはアカデミックインターンシップの参加者が年度50人以上 | インターンシップまたはアカデミックインターンシップの参加者が年度40人以上 | 奈良学園大学アカデミックインターンシップ32名、夏期、冬期インターンシップ各2名、次世代教員養成塾１名の、計37名が参加した。 | A | A | 次年度は、一つの大学だけでなく、複数大学のアカデミックインターンシップへの参加を促す。 |
| | 地元企業等との協働事業の実施 | 相互交流事業を年度計5回以上実施 | 相互交流事業を年度4回以上実施 | FMヤマト、ハイホーとのラジオ番組制作・放送は、どちらとも月１回行った。今後は、放送内容をさらに充実させたい。 | A | A | 来年度は、FMヤマトだけでなく、ハイホーからも講師に来ていただくことになった。 |
| | キャリア教育の推進 | 外部講師または社会人講師によるキャリア教育講演会を年度3回以上実施 | 外部講師または社会人講師によるキャリア教育講演会を年度2回以上実施 | 三郷町への視察及び町長の講演の予定は、三郷町の都合でキャンセルとなった。 | B | B | 三郷町との交流は終了し、香芝市との連携を充実させる。 |
| 4. 地域と協働して活躍する人を育てる | コミュニティ・スクールの運営 | 学校運営協議会を年度3回開催 | 部会の設置 | 今年度、第１回学校運営協議会は、令和5年6月20日、第2回は令和6年2月21日に開催。 | B | B | 学校運営協議会において熟議したことを実際の活動に繋げていけるよう新たな専門部会の立ち上げを検討する。 |
| | 郷土の伝統、文化、自然等に関する学習の推進 | 「奈良TIME」のフィールドワーク及びプレゼンテーションを年度計3回以上実施 | 「奈良TIME」のフィールドワーク及びプレゼンテーションを年度計各１回以上実施 | 学級でのプレゼンテーション（11月20日･27日）実施<br>学年でのプレゼンテーション（2月5日）実施 | A | A | プレゼンテーションの仕方について、その手法を学習したり、実際の発表を見たりするなど、より一層学びを深める時間を設定する。 |
| | 地域の学校との交流の推進 | 相互交流事業を年度計5回以上実施 | 相互交流事業を年4回以上実施 | 左記に加え、真美ヶ丘西小学校卒業式における卒業生用飾り花の贈呈など、年度4回以上の交流事業を実施できた。 | A | A | 真美ヶ丘西小学校からの学校探検は、大変好評であったことから、今後も交流先の意向等を十分理解した上で事業を進め、さらに交流の機会の増加に努める。 |
| 5. 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる | 人権教育の推進 | 人権学習ホームルームの事前職員研修及び外部講師による人権講演会等を年度計5回以上実施 | 人権学習ホームルームの事前職員研修及び外部講師による人権講演会等を年度計4回以上実施 | 人権講演会を兼ねた芸術鑑賞会、及び人権学習ホームルームの事前職員研修を合わせて4回実施した。 | B | B | 人権学習ホームルームで扱う人権課題は近年多様化し、効果的な授業展開にスキルが必要になっている。事前職員研修の内容を充実させるべく、「新入生アンケート」･「高校生活意識調査」の結果を反映させた指導案の策定、及び紹介・提供する教材の収集と精選を進める。 |
| | 学校いじめ防止方針に基づく取組の推進 | 校内生徒アンケートの設問「いじめや差別のない学校だと思う」に肯定的回答の割合が95%以上 | 校内生徒アンケートの設問「いじめや差別のない学校だと思う」に肯定的回答の割合が85%以上 | 校内生徒アンケートの「いじめや差別のない学校だと思う」に対して、肯定的回答の割合が3学年平均で81.0%という結果であった。 | B | B | 校内生徒アンケートにおいて肯定的割合が１年が84.1%、2年が80.3%、3年が78.7%と、学年が上がるにつれて低くなっている。学校生活のなかで悩みやトラブルを抱えることにより、肯定的意見が低下していると推測される。教育相談等を通じて生徒との信頼関係を深め、カウンセリングの活用を進めるなどの対策を早めに行うことで、肯定的な回答減少を防ぐ必要がある。 |
| | 特別支援教育の推進 | 教育相談・特別支援教育委員会を年度5回以上開催 | 教育相談・特別支援教育委員会を年度3回以上開催 | 教育相談・特別支援教育委員会を各学期１回、計3回開催した。 | B | B | 教育相談・特別支援教育委員会の開催回数は目標のとおり確保した。ただ、要配慮生徒は年々増加しつつあるにもかかわらず、担任から本委員会に諮問される生徒の報告が減少していることが懸念材料として残る。自クラスの生徒を委員会で審議することに二の足を踏む理由があると言え、その事情を精査し、本委員会の有用性を高める策を試行するなど、特別支援教育の推進に努める。 |

３ 評価結果の分析、今後の改善方策等

・令和5年度末に実施の本校生徒及び保護者を対象としたアンケートの結果として、「本校に入学してよかった」と回答した生徒の割合は、90.3%であり、「本校に入学させてよかった」と回答した保護者は、88.2%であった。昨年度より若干数値が下がっているが、ほぼ例年並みで満足度は高い。
・令和5年度末の状況を受けての学校関係者評価は、17項目のうちAが6つ、Bが8つ、Cが3つとなり、5年度末の目標値を概ね達成することができているが、体力向上、生活習慣の確立、読書活動の推進に関して、新たな課題が浮き彫りとなった。中期計画の最終年となる次年度は、現状を踏まえた適切な目標値等を設定し、生徒たちが目的意識をもって意欲的に学校生活を送ることができるよう、個々の改善方策に基づき教育活動を進めていく。